

歯冠のポジションと機能

ミリングを応用したコンビネーションデンチャーの設計

総義歯の臨床基準と排列

余田 圭司

義歯製作にはさまざまな手法や材料が用いられる。近年ではインプラントの応用などによって、咀嚼機能の回復はもとより、顔貌の回復など、患者の審美的要求にも十分に対応できる補綴物の製作が可能になった。しかし、超高齢社会を迎えるとともに経済の低迷が続く昨今のわが国では一部の患者の関心がインプラントなどの高額な治療費を伴う治療から有床義歯へと移っているように思われる。患者は有床義歯に対して「美しく(審美)」「装着感に優れ(適合)」「よく噛める(機能)」ことを期待しているが、現実にはそれらが達成されないとして不満を抱くケースも多々見受けられるように感じる。

現在では、クラスプデンチャー又はミリングを応用したコーヌスデンチャー、アタッチメントを用いたコンビネーションデンチャーなどが多用されているが、クラスプデンチャーでは審美的問題がある。ミリングを応用したコンビネーションデンチャーは、ケースにより向き、不向きがあり、高度の技術が必要とされるために短所に直面することがある。これらの問題を解決するための一方法として、筆者が現在行っているミリングコンビネーションデンチャーの臨床例を提示し、総義歯での補綴は、基準となる患者ごとの適切な咬合平面を探し出すことが重要であり、この咬合平面をどのように導いていくのか、総義歯排列のガイドラインと審美・機能を改善する排列法を臨床例にて紹介する。